第10回
国際ボランティアワークキャンプ in ASO

10th International Volunteer Work Camp

報告書

2015年8月7日(金)～8月9日(日)

国立阿蘇青少年交流の家

Contents

02 目的／概略

03 スケジュール

04 開会式
基調講演

05 第１分科会「医療」
第２分科会「貧困」

06 第３分科会「多文化共生」
第４分科会「地球環境」

07 第５分科会「ボランティア」
第６分科会「防災」

08 第７分科会「サブカルチャー」
全体報告会

09 未来職道
全体交流会

10 閉会式
お礼のメッセージ

11 アンケート報告

目的・概要

高校生、大学生等「若い人材」の「生きる力」を育む。

２１世紀の教育におけるキーワードを「国際」と「ボランティア」と位置づけ、高校生が日々の地域でのボランティア活動を点検しながら、自ら企画、運営するワークキャンプを阿蘇の大自然の中、２泊３日の宿泊型で計画・実施します。

本ワークキャンプは、高校生、留学生が一緒に活動し、日本人大学生がサポーターと参加します。分科会活動を中心に据え、動機付けの基調講演、アイスブレークを目的とした交流会、多様な活動家と出会う「未来職道」、全員参加型の報告会、大自然阿蘇観光視察等多様な活動をとおして、お互いを理解・「思い」を共有し、普段の生活の中で活かせるボランティア活動に結びつけていきます。

第１０回となる本年度のボラキャンのテーマは、「Try Evolve to the Next Age」です。未来に向けて自分自身を成長させ、新しい世界を創っていきたい！という思いが込められています。

概略

・実施年月日
2015年8月7日（金）～9日（日）
2泊3日

・実施会場
国立阿蘇青少年交流の家
〒869-2692
熊本県阿蘇市一の宮宮地6029-1

・参加者
134名
①一般高校生／実行委（EC）
87名（64名／23名）
②留学生　47名（15カ国）

・主　催
国際ボランティアワークキャンプ実行委員会
※高校生の構成メンバー及び構成団体については、裏表紙に記載しています。

未来職道協力者

多文化共生：大庭理恵子さん、竹村朋子さん、
大和賢祐さん（外国から来た子ども支援ネットくまもと「@ほ～む」）
佐久間より子さん、高岡優生さん（多文化多種コミュニティMuMuCo）
国際協力：岩坂省吾さん（Free The Children Japan 熊本）
大野章子さん、村内倫子さん（JICA九州）
菅原勇汰さん、友枝太郎さん、山越政徳さん
吉田剛さん（PRENGO APU）
国際交流：留学生の皆さん（APU）
ボランティア：坂口裕俊さん、永松達さん（熊本いいくに会）
林田隆雄さん（NPO法人ディスカバリーくまもとボランティアの会）
最相博子さん、田尻俊次さん（KLCC地雷廃絶と被害者支援の会熊本）
馬場智宏さん（熊本市社会福祉協議会）
伝統芸能：中村圭さん（English Rakugo）
環境：澤克彦さん、山畑幸穂さん（環境省九州環境パートナーシップオフィスEPO九州 Environmental Partnership Office Kyushu）
活動：興梠寛さん、西尾雄志さん、高見大介さん（全国学生ボランティアフォーラム）
安倍千佳子さん、濱洲大輔さん（トビタテ留学！JAPAN熊本県企画課）
橋村隆介さん（ユネスコスクール熊本県ユネスコ協会）
事務局：国際ボランティアワークキャンプ実行委員会事務局／SMILE Station
アドバイザー：興梠寛さん（昭和女子大学教授）、
西尾雄志さん（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター）

Schedule

8月7日（金）

9:30 熊本市国際交流会館 出発
八代駅前 出発
11:20 国立阿蘇青少年交流の家 到着
11:30～12:30 昼食
12:40 入所オリエンテーション
12:50 開会式
13:10 基調講演
14:30 休憩・移動
15:30 分科会活動1
（医療、貧困、多文化共生、地球環境、ボランティア、防災、サブカルチャー）
17:30 夕べの集い
18:00 夕食
19:00 全体交流会
21:00 入浴
22:30 就寝

8月8日（土）

6:00 起床
6:20 清掃
6:45 朝の集い
7:00 朝食
9:00～17:00 分科会2
17:00 夕飯・入浴
19:00～21:00
未来職道
（いろんな活動家と出会い話し合う！）
16団体出展
22:30 就寝

8月9日（日）

6:00 起床
6:20 清掃
6:45 朝の集い
7:00 朝食
8:45～10:30 報告会
11:00～11:10 クロージングミニ講演
11:10～11:30 閉会式
11:30～12:30 昼食
12:50 国立阿蘇青少年交流の家 出発
13:00～14:00 阿蘇神社門前町にて自由散策
14:10 阿蘇 出発
15:40 熊本市国際交流会館 到着（解散）
16:00 八代駅前 到着（解散）

「開会式」

報告者：吉村 彩花（必由館高等学校）

副委員長の小池君の開会宣言でスタートした第10回国際ボランティアワークキャンプ。今年も県内・外から、多くの高校生、留学生の参加がありました。みなさん「どんなことをするのだろう。」と楽しみな反面、緊張していたみたいです。

実行委員長の塩崎さんの挨拶で、少しそわそわしていた雰囲気が一気に引き締まりました。

そして実行委員（EC）の自己紹介で、ECと参加者たちがお互いをしっかり認識しました。「このメンバーで3日間活動していくんだ。」と実感できたのではないでしょうか。

諸注意では、青少年交流の家の使い方等を、参加者に理解してもらうことができたと思います。また最後の「廊下を走らないようにしましょう。」という一言は、場を和ませていました。

記念すべき第10回に相応しい開会式となったと思います。

「基調講演　興梠寛先生　（昭和女子大教授）」

報告者：小池 登（必由館高等学校）

記念すべき第10回国際ボランティアワークキャンプのオープニングとして興梠寛先生から基調講演をしていただきました。最初の話は国際ボランティアワークキャンプinASOの10年にわたっての歴史についてでした。ボランティアワークキャンプが誕生した時は、数名の先生が高校生を対象に話をしていたが、徐々に高校生主体となり、今では高校生が実行委員として、ボランティアワークキャンプを企画し、100人を超える高校生や留学生の前に立って運営を進めていくようになりました。

次にピーターラビットの話でした。ピーターラビットの作者はその本で得た印税を環境保護のために使いました。その活動が世界中から評価され、作者が亡くなってから50年以上たった今でも、特別に著作権は作者のものだと認められています。そして、今でも、この本の印税は環境保護の活動資金に当てられています。このように、過去から現在、現在から未来へと受け継がれていく活動や思いがあることを知ってとても感動しました。

後半はワークショップをしました。

このワークショップでは、実行委員も参加者や留学生と全員一緒になって、色々なテーマについて、自分が当てはまる項目のところで集まり活動しました。例えば、今、この国際ボランティアワークキャンプに参加して、どんな気持ちなのか、という質問に対して、「楽しい」、「不安」、「仕方ないから来てる」、「帰りたい」という4つの項目から1つ選んで集まりました。「帰りたい」という項目では一人もいなかったので、とても嬉しかったです。

最後にボランティアについて考えました。

ボランティアは、互いに理解し、自分も相手も幸せになるように心を配りあうことや主体的に考え、行動の自由を重視した活動のことだと学びました。何事も積極的で、自分から動くことの重要さを改めて実感することができました。また、色々なことに対して、視点を変えるだけで新しい世界が広がることも知りました。このワークショップで学んだたくさんのことをこれからの人生にも生かしていきたいです。講和をしていただいた興梠先生、本当にありがとうございました。

第1分科会 参加者17名 「医　療」

報告者：河野 紗季（文徳高等学校）

皆さんは世界の医療水準に目を向けたことはありますか?

第1分科会では「国際医療」をテーマに、感染症を含め発展途上国の医療の現状を知り、衛生面から見直していくためにどうしていく必要があるのか、未来を見据えて考えていくことを目的に活動しました。

1日目は他己紹介からスタートし、初めて顔を合わせた分科会メンバーとも仲良くなり、参加者の方にも沢山の笑顔が見られました。空気が和んだところで医療について話を戻し、どのようなところで日本と発展途上国で医療水準に差が生まれているのか、具体的な数値で示し、再確認することができました。また、その後「国際医療」をテーマにした物語、「ルイス君の話」の読み合わせをしました。

2日目はまず、元青年海外協力隊員の森久 友美さんをゲストに迎え、青年海外協力隊員としてブルキナファソに行かれたときの体験談を写真を交えながら語っていただき、ブルキナファソの生活の様子や感染症への取り組みなど現地の状況を詳しく知ることができました。参加者の方からも沢山の質問が出て考えを深めることができ、貴重な機会となりました。その後はジェスチャーゲームというものをやりました。これは、自分が青年海外協力隊員として発展途上国に派遣されたらということを想定し、言葉を使わずにジェスチャーだけで、いかに相手に分かりやすく説明するかを体験してもらうものでした。言葉が通じない中で相手に理解してもらうことがどれほど難しいものなのか、身を持って感じることができたと思います。次に、「ルイス君の話」の中で主人公が死に至った原因、そしてその解決法をグループに分かれて話し合い、お互いの意見を交換し合いました。それから、発展途上国での医療水準を向上させるためにどんな解決策があるのか、1人1人考えてもらい、それを発表してもらいました。発展途上国に物資支援をしたり、募金活動をすることも大事ですが、最終的には1人でも多くの人たちが、これらの国々の医療に目を向け、興味を持つことが1番の解決への近道だという結論に至り分科会活動2日間の幕を閉じました。

あっという間の3日間でしたが、色んな人の意見に触れることができ、とても貴重な経験をさせていただきました。最後になりましたが、この分科会活動に携わっていただいたオブザーバーの方々、大学生スタッフや参加者の皆さん、心から感謝致します。ありがとうございました。

第2分科会 参加者19名 「貧　困」

報告者：合田 優一朗（文徳高等学校）

第2分科会「貧困」では、貧困国の子どもたちの現状を知り、改善策を考えるということをテーマにして活動しました。

1日目はアイスブレイクを重点的にやりました。最初に「他己紹介」というものをしました。二人一組で自己紹介をし合って、相手のことを他の参加者に紹介しました。次に、「カテゴリー」をしました。共通点を持つもの同士で集まり、その共通点について会話をするというものです。最後に、「人間知恵の輪」をしました。これは5～6人ほどで手を繋ぎ、試行錯誤しながら交差した腕をほどいて、1つの輪を作ろうというゲームです。終わる頃には皆互いにうちとけ、とても良い雰囲気になっていました。

2日目はアイスブレイクをした後に、貧困に関するDVDを2枚見ました。1枚目は世界では、1秒間に341人の子どもが亡くなっていることを強調する、メッセージ性の強い「341」と、2枚目は世間一般の人にも貧困国の暮らしを知ってもらおうという※「シュヌン シュヌン」でした。その後3つの班にわかれて、貧困に関してDVDを見てメモしたことや知ったことをウェビング法で書き出しました。そこから各班1つずつ貧困を無くすためのキーワードを決めました。「医療」「教育」「仕事」がキーワードとなり、それらについて各班で、「どうしてそれがキーワードに選ばれたか」「どうしたら解決できるか」「私たちにもできることは何か」の3点を話し合いました。

国際的なことを話すことにおいて、留学生の意見はとても貴重なものとなりました。第2分科会には韓国とアフガニスタンからの留学生が自分達にはない経験や知識を共有してくれて、円滑に話し合いを進めることができました。全員で貧困について考えることができました。

みんなで話したり、写真を撮ったり…。この分科会でたくさんの新しい仲間をみつけました。世界の貧困問題についてボラキャンの場を借りて話し合い、知識を深められたことはとてもいい経験でした。今回学んだことや経験を、社会に出て行った後、きっと役立つことでしょう!

※「シュヌン」とはベンガル語で「聞いて下さい」という意味

第3分科会 参加者18名 「多文化共生」

報告者：草野 詩音（必由館高等学校）

私たちは、互いの文化の違いを認めあい、外国人の方々が日本でより良い生活を送ってもらうために様々な活動を通し多くの考えを出しあいました。

まず1日目には中国でポピュラーなゲーム「愛のだきしめ」をしてアイスブレイクをしました。その後、竹村朋子さんによる「やさしい日本語の話し方」の講話をききました。そこでは実際にやさしい日本語を使って会話をしました。言葉は違っていましたが、交流を深められたと思いました。

2日目には、アイスブレイクの後、留学生を対象にしたアンケートを使って各国のイメージについて考えました。そこでは、日本人が思っている日本のイメージと留学生から見た日本のイメージの比較をしました。意外な違いも多々あり関心を持ちました。次に、ECの一人が講師となり「アイデンティティ」について考えました。その中ではスペイン語で小学生レベルの算数の授業をうけました。急に先生に当てられても、言葉がわからず答えられませんでした。これは、私だけではなく皆が感じたことだと思います。また寸劇を通し、文化の違いから大きな誤解がうまれることを学びました。昼食後には、外国から来た子供たちの経験を発表し困ったことに対する改善方法を話しあいました。計画していた流れが全て終わった後、二十分程時間が余ったので、分科会のメンバーと楽しく話をしました。わずかな日数で、こんなにも親しくなれるんだなあと感心しました。そして多文化共生社会とは、互いを理解することにより外国人と日本人とが共に楽しく暮らせるようになることだとわかりました。

第4分科会 参加者18名 「地球環境」

報告者：池田 知徳（熊本学園大学附属高等学校）

第4分科会では災害に巻き込まれた時、救助がくる3日間を生き延びる方法について考えました。そしてその時に必要な火の起こし方について考えました。

1日目は、アイスブレイクとして人間知恵の輪をしました。最初は緊張している人が多かったですが、人間知恵の輪をするとすぐに馴染むことができました。

その次に、自転車で発電しその電気で扇風機を回し風で動く車を動かしました。また、参加者同士で動かして競ったりしました。

2日目は、午前中は九州バイオマスフォーラムの中坊真さんのお話を聞きました。中坊さんのお話では、環境白書や火山についてのお話がありました。またその時に参加者の皆さんに火の起こし方について考えてもらいました。参加者の中に韓国の方やスリランカの方がいたのでコミュニケーションに苦労することが多々ありましたが、電子辞書などを使うことで乗り切ることができました。

午後は午前中に考えてもらった火の起こし方を実践してもらいました。虫眼鏡で太陽光を集め火を起す方法と、木の摩擦で火を起す方法をしました。虫眼鏡で太陽光を集める方法は上手く火をつけることが出来ました。しかし、木の摩擦で火を起す方法は火を起こすことが出来ませんでした。原因としては、煙までは出ましたがうまく着火できなかった事と木が完全に擦り減ってしまったことです。しかし、起こした火でお湯を沸かし紅茶をみんなで飲むことができました。その次に、薪割り体験をしました。まず中坊さんがまきの割り方を教えてくれました。斧の重さで力を入れず薪を割ることを教えて貰いました。そして参加者の方に体験してもらいました。最初は薪を割ることができませんでしたが、慣れてくると上手く薪を割る事が出来ました。また、中坊さんに効率の良いロケット式薪ストーブについても説明していただき、ロケット式薪ストーブはかなり効率よく少ない薪でもよく燃えるので、木の消費が少なくなり自然環境を守るのに大変役立つとのことでした。

報告会のまとめでは、参加者の一人一人に今回学んだこととその感想を付箋に書いてもらいました。韓国の方は日本語があまり使えないので、韓国語で書いてもらいました。その為、説明や会話は英語でしました。全くお互いに日本語や韓国語がわからないので英語がかなり役に立ちました。

今回僕はこの3日間を通して自然災害にあった時に生き延びる方法、特に火おこしや、効率の良いエネルギーの使い方について学ぶことができました。またそれだけではなく国際ボランティアワークキャンプの名前の通り色々な国の人と活動することができました。

その中で特に重要なことだと考えたのは、人とのコミュニケーションです。やはりその為には共通語である英語がもっと自由に使えたら良いなと感じました。

この3日間を通し分科会の活動である自然災害が起きた時に救助がくる3日間を生き延びる方法だけでなく、たくさんの国の人と交流することで英語の大切さを改めて感じました。また中坊さんやEPOの方々、ご協力ありがとうございました。

第5分科会 参加者20名 「ボランティア」

報告者：吉野 真由（文徳高等学校）

「自分の行った募金や送った支援物資の行方は？」

第5分科会では、この疑問を解決するために様々な話し合いや活動を行いました。また、「ボランティア」を考えるうえで今まで起こった詐欺や事件を知り、対策を立てることを第二の目的として分科会活動を進めました。

1日目はアイスブレーキング「人間知恵の輪」からスタートしました。初めは、初対面の人と手をつなぐことにためらいの表情を見せていた参加者の皆さんも、後半になると声を掛け合い、いい雰囲気がつくれました。次に、「ボランティア」についてブレーンストーミングを行いました。留学生の方々の出身国のボランティアや日本にはないものをたくさん知るいい機会となりました。

2日目はECのプレゼンを通して「募金」についてのブレーンストーミング。そして、募金詐欺のプレゼンの後、「信頼できる団体とそうでない団体の基準・募金詐欺を防ぐための対策」についてグループディスカッションを行いました。驚くほど多くのアイディアが出て、ここでも留学生の方に様々な団体や自国の取り組みを話して頂きました。次に、これらのディスカッションを通してそれぞれの理想のボランティアについて考えました。具体的な取り組みを考え、共有することで、今まで考えもしなかった新しい視点からのボランティアを見出すことができました。募金についての講演も拝聴し、募金が身近なところで役立っていると感じることで、人々は信頼して募金をするようになること。詐欺を起こさないために何重も募金のチェックがおこなわれていること等、学校の授業や普段の生活では決して教わることのない深い内容を知ることができました。参加者の皆さんには、講師の方に質問をしたり、自分の考えをなんとか留学生に伝えようとしている姿がみられました。二日間の活動をまとめ、報告会で発表する際にも留学生も高校生も協力して作業を進め、それぞれの伝えたいことを発表できるように工夫をこらしました。

今回の活動を行った中で、参加者の皆さんが以前にも増して「ボランティア」に積極的になり、詐欺にあわないための判断が出来るようになってくれたらいいなと思います。そして、ここで学んだ国内外のボランティア・自分が考えた新しいボランティアのことを周りにどんどん広げていってほしいです。

この分科会活動を支えて下さったすべての方と、積極的に取り組んでくれた参加者の皆さんに感謝します。

第6分科会 参加者11名 「防　災」

報告者：稲下 喜子（文徳高等学校）

第6分科会"防災・支援"では東北大震災を題材とし「被災に遭われた方々は何を求めているのか」ということについてみんなで考え、それを元に私達ができる身近な支援を考えるという活動をしました。

1日目は「人間知恵の輪」というアイスブレーキングから始まりました。偶数のグループを作り、隣以外の人と手を繋ぎ、協力して一つの輪を作るというゲームです。お互い相手と相談しながらするゲームなので自然に分科会メンバーと打ち解け、話し合いをしやすい雰囲気となりました。

また、震災直後に現地へボランティアとして行った熊本市役所職員の藤本純二さんから震災直後の映像を交え、実際の被災地の様子を聞きました。藤本さんのお話や映像をみての感想を出し合いました。留学生など震災についてあまり知識がなく初めて映像をみた参加者からは、実際の光景を見てショックを受けたという意見が多く出ました。

2日目は1日目に得た情報を元に「被災に遭われた方々は何を求めているのか。」ということについてブレーンストーミング法を用いて意見を書き出しました。次に出た意見を"ボランティアの方に求めること(個人レベル)""NPO等の団体に求めること""国に求めること"の3つのグループに分けました。

次にどの位の期間でして欲しいことなのかについて"短期(1週間以内)""中期(1~2ヶ月以内)""長期(1年以上)"という3つのグループに分けました。思った以上に多くの意見が出て良い活動になりました。

このような意見を元に1人1人が実行可能な支援を考え、それぞれ目標を書きました。

3日間という短い時間でしたが、この分科会活動を通して少しは関心を持ってもらえたと思います。このボランティアワークキャンプがきっかけとなって、ボランティアなどに積極的に参加する人が増えると嬉しいです。また、この企画を無事に終えることができたのは今まで支えて下さった方々のおかげです。本当にありがとうございました。

第7分科会 参加者26名 「サブカルチャー」

報告者：小森田 瑞季（文徳高等学校）

第7分科会では、サブカルチャーをメインテーマにしました。テーマを決める際、私は日本のサブカルチャーをもっと外国に広めたいと思い推薦しました。サブカルチャーは日本の文化ですが、伝統的なメインカルチャーとは違い、漫画やアニメを代表とした様々なオタク文化で、今日本でも海外でもとても注目されています。ボランティアと言われると硬く考えがちですが、サブカルチャーなら気軽に参加できるかなと思いました。サブカルチャーを通して海外の方にもっと日本を知ってもらうこと、またサブカルチャーを生かした奉仕活動を考えて国際協力を身近に考えてもらうことを大きな目的としてました。

話し合いの段階では、テーマが今までにないものだということで賛否両論ありましたが、自分たちが話し合いたい内容をより具体的にするべく努力しました。本番当日は予想をはるかに上回る人数の参加者が集まり、1日目に行ったアイスブレーキングの山手線ゲームでは、日本文化をテーマにたくさん盛り上がりました。1日目の後半と2日目は主にディスカッションを行ったのですが、予定していたディスカッションのテーマを変更したり、増やしたりと、臨機応変に動くことがいかに大事か改めて学びました。

本番は、予想以上に多くの意見が出され盛り上がりました。一人一人のアクションプランや、第7分科会のアクションプランを考える際は色んな意見や個性を感じることができ、とても具体性のある活動を考えることができました。

第7分科会に参加してくれた皆さん、3日間本当にありがとうございました。今回のボラキャンでの経験を生かして、私たち高校生でも、色んな視点から社会に貢献できるんだということも感じてくれたら嬉しいです。自分にとっても、今回のECとしての参加は本当に実りある経験となりました。ありがとうございました。

「全体報告会」

報告者：濱田 ほの香（第一高等学校）

3日間活動の中で最期を締めくくるのが、全体報告会です。

みんなで出し合ったアイデアをポスターにまとめ、分科会をそれぞれ、7つのグループに分けてポスターセッションで行い、一人一人全員がそれぞれ発表し、2日間の感想を言えるような形にしました。中には、留学生と高校生が共に発表している分科会もあり、みんな笑顔で日本語を高校生がフォローしながら協力しながら楽しんで発表をしている様子が伺えました。

質疑応答の時間には質問が活発に飛び交い、それに答えることで、各分科会の内容とまとめについて、さらに理解も深まったと思います。

また、他の分科会の活動内容や考えを聞いて、それぞれの問題に対する考えがこれまでとは変わったり、より深く考えたりすることができました。これらを今後の行動に生かして、自分たちの明日を良いものに出来るようになればと思います。

報告会が終わったあと、再び、分科会ごとに集まって、各グループで出された意見や質問を持ちよりました。「制限時間いっぱい使って2日間の内容や感想を発表することができた」や、「報告がスムーズにいった」など良い報告会になったとの声が聞かれました。

「未来職道」

報告者：松濤 好恵（熊本信愛女学院高等学校）

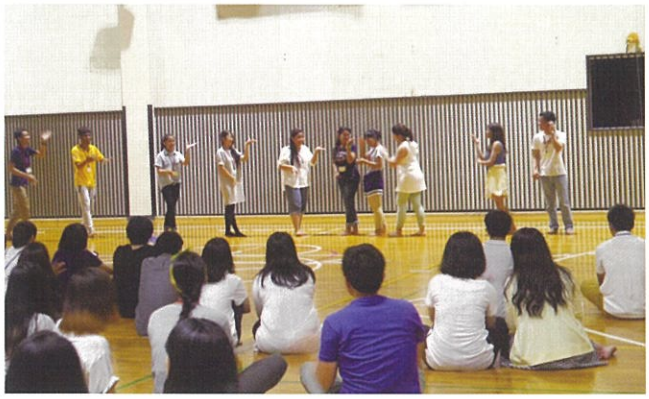
ボランティアワークキャンプ2日目の夜に行った「未来職道」では、熊本をはじめ世界各地で様々な活動を行われている16団体の方々のお話を聞くことができました。各団体紹介から始まり、参加者の皆さんは興味のあるブースに移動し、普段直接話す機会のない活動家の方々のお話を熱心に聞いていました。活動家の方々も、世界の現状を皆さんに知ってもらい、その上でその団体がどのような活動をするのか参加者に伝えて下さいました。実際に話を聞いてみると、世界でなにが起きているのか知り、その上で自分に出来ることを考え、視野を広げることができました。そして、活動家の方々の思いを直接肌に感じることができて良かったです。また、APUのブースでは、民族衣装を着た大学生と写真をとったり、とても楽しい時間が送れたのではないかと思います。そして、浴衣を着たECメンバーもとても人気で華やかな雰囲気でした。16団体の方々のお陰でこのような素晴らしい未来職道を行うことができました。各団体の話しを聞いて学んだことや考えたことをこれからの生活で生かしていってほしいと思ってます。またやりたいなと思った活動がある方はぜひ挑戦してみて下さい！

「全体交流会」

報告者：千々松 綺夏（文徳高等学校）

1日目夜の全体交流会では、分科会に関係なく参加者全員で楽しみました。まず始めに「バースデーチェーン」をやりました。言葉を使わずジェスチャーのみでお互いの誕生日を伝え合い、誕生日が早い順から並んでいきます。少し難しかったようですが、順番通りに並ぼうと必死に手を使って自分の誕生日を伝えていました。並び終えると、同じ誕生日の人同士が真ん中に出て答え合わせをしました。そして次は「ポニー」です。まずECがお手本を見せ、いざ本番。手拍子に合わせて円の中をスキップしながら回ります。ポニー役の人が目の前に立つと、恥ずかしがりながらも笑顔で一緒に踊ってくれました。少し体を動かした後は「時限爆弾」というゲームをしました。いくつかお題を書いた風船を回し、音楽が止まったところでそれを持っていた人がお題について話をしなければなりません。音楽が始まると参加者は自分のところに風船が止まらないように急いで回します。悲鳴と笑い声があちこちから聞こえました。「猛獣狩り」では動物の名前の文字数に合わせてその人数でグループを作ります。なかなか人が集まらなかったり、逆に人が多過ぎるグループもありました。最後は参加してくれたカンボジアからの留学生の皆さんに自国のダンスを教えていただき、参加者全員で踊りました。

この全体交流会では、一般参加者だけではなく留学生の皆さんとも打ち解けることができたと思います。会場となった体育館にはたくさんの笑い声が溢れ、最高の一夜になりました。記念撮影の時には参加者全員の距離が縮まっているのを感じ、とても嬉しく思いました。



「閉会式」

報告者：田口 朋（文徳高等学校）

閉会式は3日間にわたる「ボランティアワークキャンプ in ASO」の"終点"であり、また、世界へ羽ばたく、もしくはボラキャンで築いた人間関係を生かして活動を始める"出発点"でもあります。

今年の閉会式は大研修室で行われました。閉会式の直前に報告会があったので、そのときに使用した椅子を各自で並べ、閉会式の形を作りました。椅子の移動はEC、大学生、参加者の全員でてきぱきとこなしました。とてもよかったです。

閉会式の最初に日本財団学生ボランティアセンター代表理事の西尾さんにボラキャン3日間の講評と、講話をいただき、その後、1～7の各分科会を代表して参加者の方に感想を発表してもらいました。「楽しかった」だけでなく、「参加してよかった。」「たくさんのことが学べた。」という声が多く聞かれ、3日間充実した分科会活動が送れたようでした。

フィナーレはみんなでボラキャンのテーマソング「キセキの旅」の合唱です。今年は初めて実行委員によるこの歌の解説ナレーションを行いましたが、参加者にはとても好評でした。ですが1点だけ反省点があります。私が参加者として参加した昨年のボラキャンの時から思っていることですが、『うたっているECの声がほとんど聞こえない』ということです。練習する時間も少なく、曲も難しいということも原因の一つだと思われますが、参加者側にECの声が届いていないように感じました。

閉会の言葉で「今回のボラキャンを楽しめましたか？」という問いを投げかけてみたところ、例外なく全員が「はい！」と答えてくれました。ECの中には連日、徹夜だったり、思いがけないトラブルが起きたりした人もいて、大会が終わるまでには、たくさんの苦労があっただろうと思います。ですが、そんな苦労を消し去るくらいの達成感を得ることが出来ました。

この閉会式は3日間の感動的な締めくくりとなりました。不安いっぱいのECメンバーで心配事も多かったようですが、大学生スタッフの方や元ECメンバー、支えてくれる大人の人たちの応援や助け、EC自身の頑張りによって大成功！？に収めることが出来ました。感謝です。

普段、外国のことに目を向ける機会のない人たちが世界のことを知ることができ、新たな道を示してくれるこのボラキャンがずっと続いていくことを願います。

「お礼のメッセージ from 実行委員会」

実行委員長：塩崎 理子（文徳高等学校）

こんにちは。第10回国際ボランティアワークキャンプinASOの実行委員長をさせていただきました、塩崎理子です。

まずはじめに今回のボラキャンに参加していただいたみなさん、本当にありがとうございました。

私たちECは昨年度の12月から準備を始めました。最初は人数も少なかったものの、最終的には25人でボラキャンを作ることができ、嬉しく思っています。

メンバーも忙しい人が多かったり、家が遠く、中には熊本市内まで2時間以上かかる人もいたりしました。そのため例年より会議の回数が少なく、関係者の方々にたくさん迷惑をかけた面も…。また、全体の話し合いが思い通りに進まなかったり、意見の相違があったり、分科会でもたくさん大変なことがあったかと思います。しかしその中で他校や他学年関係なく、ECも仲良くなれました。そして何より本番での参加者のみなさんの笑顔を見ることができたのが一番嬉しく感じました。

ECの会議記録を見直してみると、その回ごとの活動を思い出します。

分科会を決めたとき、スケジュールを組み立てたとき…、私たちがボラキャンのテーマを決めたとき。

『Try Evolve to the Next Age ～共に進もう輝く明日へ～』

英語部分は"未来に向けて進化しよう"という意味です。

さて、今回のボラキャンはテーマにふさわしいものになったでしょうか？

3日間という短い間でしたが、たくさんの友達ができたと思います。そんな仲間と輝く未来を作ってください。たくさんの経験をしたと思います。その経験を多くの人に伝えてください。そして自分自身で学んだことを思い返して見てください。

そうすればきっと、今回のテーマを実感できると思います。

これからの時代を作るのは私たち若者です。より良い世界を作るために今回のボラキャンでの経験がみなさん自身のこれからに生かされればと思います。

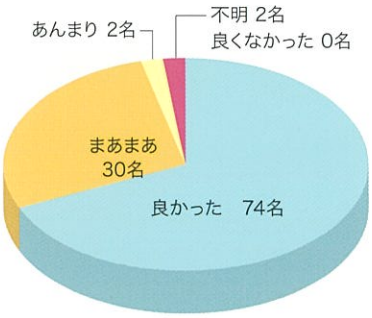
最後に。これまで一緒に頑張ってきたEC、サポートをして下さったスタッフの皆様、そして第10回のボラキャンに参加して下さったみなさん、

本当にありがとうございました！

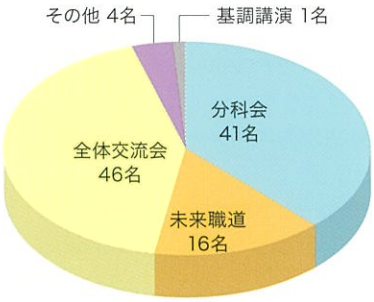
みなさんとの出会いに感謝します。

アンケート報告
Questionnaire

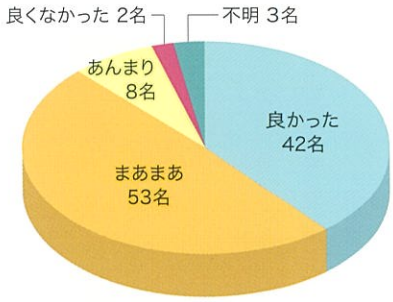
未来職道はどうでしたか？



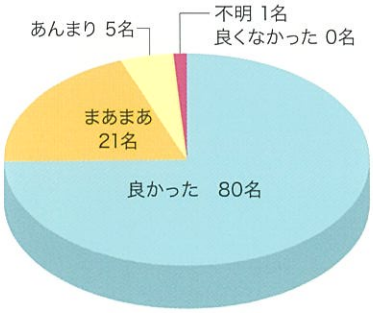
一番印象に残った活動はなんですか？



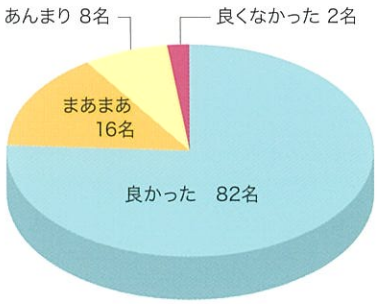
基調講演はどうでしたか？



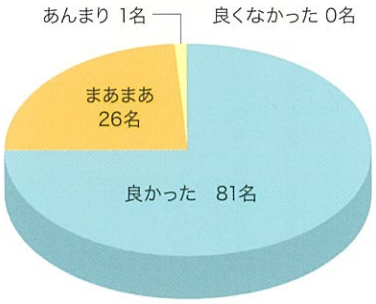
分科会活動はどうでしたか？



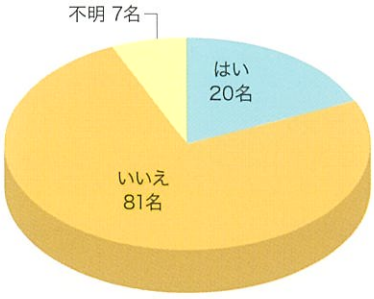
実行委員の対応はどうでしたか？



全体交流会はどうでしたか？



実行委員をしてみたいと思いましたか？



2015.6 阿蘇青にて実行委員の合宿会議

2015.7 APUを訪問して説明

2015.7 分科会の進め方をリハーサル

2015.3 大会スケジュールが決定

2015.8 サポーター(OB・OG)と対面

2015.1「分科会」のテーマが決定

2015.8 いざ、本番！

2014.11 第10回ボラキャン Kick Off

2015.8. 大会終了後の反省会

主 催

第10回 国際ボランティアワークキャンプ 実行委員会

高校生実行委員会メンバー

塩崎　理子 文徳高等学校(実行委員長)	稲下　喜子 文徳高等学校
田口　　朋 文徳高等学校(副委員長)	大下　　哲 文徳高等学校
小池 登 アンヘル 必由館高等学校(副委員長)	河野　紗季 文徳高等学校
浅畑　りほ 天草高等学校	合田優一朗 文徳高等学校
池田　知徳 学園大学付属高等学校	小森田瑞季 文徳高等学校
吉本　実緒 学園大学付属高等学校	田中　達也 文徳高等学校
三浦　知佑 熊本高等学校	千々松綺夏 文徳高等学校
松濤　好恵 熊本信愛女学院高等学校	吉野　真由 文徳高等学校
立花　真亜子 第一高等学校	根本　亜美 文徳高等学校
濱田ほの香 第一高等学校	藤本　香織 文徳高等学校
草野　詩音 必由館高等学校	福島菜々子 文徳高等学校
早野　小雪 必由館高等学校	臼井　友梨 マリスト学園高等学校
吉村　彩花 必由館高等学校	

10th International Volunteer Work Camp

構成団体
株式会社近代経営研究所　熊本ユネスコ協会　熊本留学生交流推進会議
一般財団法人熊本市国際交流振興事業団　株式会社日本リモナイト

協賛・協力団体
立命館アジア太平洋大学(APU)　独立行政法人国際協力機構九州国際センター

後　　援
熊本県教育委員会　熊本市教育委員会　熊本日日新聞社

平成27年度 子どもゆめ基金助成事業

事 務 局
一般財団法人熊本市国際交流振興事業団
熊本市中央区花畑町4番18号　熊本市国際交流会館
TEL：096-359-2121